

## 農業雑誌の受容と実践

——南多摩郡平尾村 鈴木静蔵の事例を中心に——

福 澤 徹 三

はじめに

「書物・出版と社会変容」の問題を明治中後期において考えたとき、欠くことのできないのが新聞・雑誌の影響であろう。このような観点からの研究は、これまでマス・メディアの形成過程としてなされてきた。<sup>(1)</sup>とくに、明治二七年に博文館が発行を開始した雑誌『太陽』はマス・メディア研究の象徴ともされ、ぶあつい研究蓄積がある。<sup>(2)</sup>ここでは、読者は情報や知識を受けとるだけの存在として描かれがちである。

しかし、農村に目を転ずると、この時期は地方名望家の活躍した時代であった。また、地主制の確立期でもある。農村において最大の関心事であった農業について、新聞だ

けが情報を伝えたのではなく、専門の農業雑誌が発行され、受容された。

管見の限りでは、鹿野政直が『農業雑誌』を取り上げているが、検討の時期は明治前半期に限られ、また読者の在り方についての検討はほとんどみられない。<sup>(3)</sup>また、伝田功や藤井隆至の成果は、農業思想自体の検討が中心で、農業雑誌の受容についての検討や、地域との関わりについての分析が手薄である。<sup>(4)</sup>

本稿ではまず、農業雑誌自体の検討を行い、その内容と展開過程について概観してみたい。そして、農業雑誌の読者であり、また投稿者でもあった鈴木静蔵の事例により、その受容過程を検討する。最後に農業雑誌を通して行われた農事改良が農村をどのように変えたのかを論じた上で、

農業雑誌の果たした歴史的意義について考察したい。

## 第一節 『農業雑誌』の発刊・展開とそのスタイル

### 1 『農業雑誌』の発刊と休刊

『農業雑誌』を発刊した津田仙は旧佐倉藩士であったが慶応三年には勘定吟味役として米国に派遣され、維新後は築地ホテル理事として外国人向の野菜不足に苦しんでいるのを見て、取りよせて栽培を始めたのが農業の専門家としての出発点であった。明治五年に政府からウィーンに派遣され「媒助法」を先進の農業知識として得て帰国した。帰国した津田は明六社に参加、最終号に近い『明六雑誌』第四七号に「媒助論」を載せている。その後、東京の麻布に学農社を起こし社主となり明治九年一月『農業雑誌』を発刊、自らも時折筆を執った。<sup>(5)</sup>『農業雑誌』は農業の総合雑誌との内容にふさわしいもので、米作だけでなく、幅広く畑作・養蚕・家禽も含めて農業の知識を広め交換する、というのが発刊の主旨であった。実際、所収されている記事を分析した研究によると、幅広い分野をバランスよく網羅していることが指摘されている。また、第一号に「広く泰西の農書を講究し普く本邦の農業を折衷し新法を摘訳し良

法を考案し世の裨益を謀らんと欲す」とあるとおり、従来の「宮崎貝原其他の諸哲排出して能書を著し農術を説くものありと雖も、理化其他諸学の未だ開けざるを以て要するに論理の浅陋を免れず」とこれまでの農学者の歩みを一定に評価しながらも、科学的態度によって大きく農業の進展を図ろうとするものであった。当初は月二回の発行であり、明治一三年五月からは隔土曜日出版に若干発行回数を増やし、順調に経営を続けた。明治期の雑誌は、「三号雑誌」との言葉があるほどその発刊・廃刊は頻繁である中で、<sup>(7)</sup>『農業雑誌』の継続性・安定性は評価されていだろう。<sup>(8)</sup>

『農業雑誌』は発刊の当初から読者からの意見・投稿を歓迎した。確かに、当初から読者の反応・意見・論考は見られるが、後に検討する明治二〇年代ほど目立つものではない。例えば、発刊から五年後の構成をみると、質問応答や寄書など、読者とのやりとりのページが目立ってきてはいるが、それでも全体の四分の一ほどであった。<sup>(9)</sup>内容は、はじめは「媒助法」についての論考が続き、『明六雑誌』からの引継ぎかと思わせるが、「媒助法」についての真偽・効果についての論考は明治一五年以降を絶つ。

このように順調であった『農業雑誌』の経営に、松方デ

フレは深刻な影響を与えた。「政治的な言論は控え、農業の学理・知識の伝播」を使命とする『農業雑誌』は、松方デフレ下の深刻な農村の状況に対してはほとんど意見を表明していない。そのような姿勢は、この時期に「乗馬指南」という論考が論説欄に見られることに象徴されている。<sup>(10)</sup>だが、明治一七年九月から翌年二月までの半年間、『農業雑誌』は休刊を余儀なくされた。<sup>(11)</sup>復刊の社告には「近年地方農業の不景気よりして吾が看客中も雑誌代価を払ひ越されざるも甚だ多く」と記されているが、これは言葉どおりに考えていいだろう。一冊八銭、年間で二円弱の購読料は決して安くはない。在村の上中豪農・地方名望家層を讀者としていた『農業雑誌』は、ここで転機を迎えたのである。

## 2 明治二〇年代の農業雑誌の興隆とスタイルの確立

負債農民騒擾と秩父事件の衝撃であろうか、事件後の『農業雑誌』で初めて地主・小作関係を本格的に取り上げたものがみられる。「小作条例の取調着手」<sup>(12)</sup>と題された論考は、「所謂小作の事の如き実には農政中の最も重大なるものにして凡そ農を以て国を建る吾が日本帝国の農事に着目するものは皆な必らず計画する所あるべきの問題な

り」と正面から地主・小作関係を取り上げた点で『農業雑誌』の中でも唯一の論考とっていいだろう。しかし、この方向性はほとんど受け継がれなかった。もともと、アメリカ型の大農法を日本に導入することを基調とした『農業雑誌』には、零細圃圃な日本農業の改良への強い意欲が誌面からは窺えるが、実際に日本農業をどのように大農法に変えていくのか、といった現実を直視した議論は遂に深められることはなかった。(それが実現できる理想郷として北海道をとらえ、『開拓雑誌』の発刊を「行いはしたが」。結局は農事改良を進めていくといった点に収斂するほかなかった)のであり、明治二一年には早くも雑報欄に「地主による小作米改良」との記事が表れる。地主が小作米の品評会を行い、それによって農事改良を推進することを意図したものである。この時期の『農業雑誌』には、このような記事が多くみられ、その後もこのような基調が変化することとはなかった。

明治二〇年頃から、雑誌の興隆を告げる年末・年始の挨拶が見られるようになる。<sup>(13)</sup>月三回の発刊体制を整備し、明治二六年の発行部数は一号あたり三四〇七部を数えている「表上」。また、この時期は同種の雑誌が相次いで創刊され

表1 農業雑誌発行部数

配布	農業雑誌		日本農業新誌		農事雑報		農業三誌計
	回数	計	回数	計	回数	計	
明治26年	3	3,407	2	8,792	-	-	12,199
明治27年	3	3,088	1	9,197	-	-	12,285
明治28年	3	2,680	1	3,069	-	-	5,749
明治29年	3	3,005	2	-	-	-	3,005
明治30年	3	3,061	2	-	-	-	3,061
明治31年	3	2,927	1	-	1	1,647	4,574
明治32年	3	2,863	1	-	1	2,693	5,556

(注1) 『警視庁統計書』(クレス出版、1997年)より作成。項目を一部省略しているため合計は合わない。

表2 主な農業雑誌の発行期間

雑誌名	発行者	発刊	廃刊
農業雑誌	学農社	明治9年	大正9年
農事新報	有隣堂	明治21年	明治32年
産業時論	産業時論社	明治23年	明治24年
日本 農業新誌	博文館	明治25年	明治27年
	農業社	明治28年	明治30年
	東京農書館	明治31年	明治32年
農業世界	農業社	明治32年	明治34年
興農雑誌	東京興農園	明治27年	明治41年
農事雑報	農事雑報社	明治31年	明治42年
農業世界	博文館	明治39年	昭和43年

(継続関係)

表3 明治29年11月5日『農業雑誌』第606号内容一覧

項目	内容	頁	行
論説	農家の副産に就て (前号の続き)	1	
	苹果の培養 (前々号の続き)	4	
雑報	御料の牛乳		10
	大小林区署の存廃説		19
	日本園芸会の小集会		5
	二十八年年度の蚕糸業調査		9
	宮廷の菊花		5
	養兔紡績		18
	関東農区大会		4
	静岡県農報		12
	北信地方の初雪		5
	泊夫藍「サフラン」(表紙絵参照)		6
	種物分与報告八件		1
官報	台湾総督府令第四十七号 (台湾官有森林原野貸渡規則の件)		40
	森林調査	0.5	
	台湾樟脳調査	1	
寄書	香蕉の説 (前号の続き)	1	
	早熟中島小豆栽培実験	0.5	
	家禽養に就て	0.5	
	棕櫚栽培法	1	
	稲種の浸水に就て	0.5	
	救荒植物の大意	0.5	
問答	漬物二方		8
	馬毛採取法 (第600号第4問答)		10
	種子貯蔵に就て (第602号第2問答)		10
	極早熟豌豆 (第602号第3問答)		6
	茄子の立枯病予防 (第602号第4問答)		9
	陸稲黄萎予防法 (第602号第5問答)		10
	日陰地の生籬用樹木 (第602号第7問答)		6
広告	質問新題十一件	0.5	
	桑苗予定代価表	計16	-
	養蚕講義		
	麦作全書		
	速記法伝習 其他数件		

※1頁は28行×2段

〔種物分与報告8件〕

種類	行
●稈稲一種糯稲一種	6
●稻二種と楠苗	11
●孔雀粟	5
●ボンキン一種	5
●葱と除虫菊	6
●沃草 [エビスグサ]	6
●風穴貯蔵蚕種	7
○麦種請求者諸君に告ぐ (分与辞去)	5

〔質問新題11件〕

内容	行
(1)洋種葡萄栽培法	3
(2)農閑製紙業の器具代、製造高	2
(3)和紙製造法の伝習日数	2
(4)製紙業の漂白方	5
(5)栗樹栽培法	1
(6)果実の糖蔵方	2
(7)茶樹栽培法	1
(8)赤土質山林に適する植物	2
(9)馬鈴薯の肥料	2
(10)宅地周囲の杉植理由	4
(11)桑樹の害虫対処、予防	4

(注) 網掛けが「読者参加型ページ」部分。

た。「農事新報」「日本農業新誌」「興農雑誌」の発刊は全て明治二〇年代に行われている「表2」。のちに雑誌「太陽」を出す博文館の『日本農業新誌』は特に発行部数が多い<sup>(14)</sup>。博文館は『日本農業新誌』を『太陽』<sup>(15)</sup>に吸収してしまいが、他の発行者から継続後誌が明治三四年まで続いていく。明治二六〜三二年までの統計は、データが三誌に限られているが、この時期の農業雑誌は、少ないときでも五千、最も多い明治二六、二七年には一万を超える部数が毎号刊行されていたことになる。

そして、この時期は『農業雑誌』のスタイルが確立した。明治二九年の『農業雑誌』第六〇六号を例にとって見てみよう<sup>(16)</sup>。「表3」。論説・寄書・問答・雑報・種子分与報告・広告が主軸をなしている。「読者参加型ページ」の多さに注目したい。分量にして全体の約四割を占める。寄書は購読者の意見、問答は読者への回答と新しい問

い、種子分与報告は郵便で請求があれば米、麦、野菜など自らが栽培している種子を請求者に送る記事欄であり、その栽培結果の報告もときおり誌上でなされている。種子分与報告に掲載された種子に対して、読者からの郵送請求があまりにも多いため「辞去」する報告者も見られる。このような「辞去」は、種子分与を受けることにより農事改良を行おうとする読者の多さを表すものである。「辞去」をする報告者の中には、「もうすでに八〇〇件余の請求に応えたが、これ以上は無理である」といったものである。<sup>(17)</sup>

先述のように『農業雑誌』は創刊当初から読者からの意見・投稿を歓迎していたが、それが爆発的に紙面を覆うのがこの時期の特徴である。問答は当初には学農社の関係者が直接答える形式をとっていたが、地域の事情については在地同士の意見交換が望ましいとした編集部判断により「読者の投稿」↓「誌上への掲載」↓「他の読者の回答(掲載)」といった形式が明治二二年頃確立した。このような過程は種子分与報告にも窺える。種子分与報告は、雑報欄に一件報告が載ったのを嚆矢とし、分量を増していくにつれて編集部がコーナーを設置し、規則を制定した。多いときには二ページにわたって誌上を埋めることになる。<sup>(18)</sup>

このような傾向を生んだ背景には、新しい種子の植え付けや養蚕の広がり、当時入ってきた無機質肥料(人造肥料、過燐酸石灰)の効果など、多くの読者に自分以外の地域の状況を知りたいとの願望があり、他地域の導入成果を検証し農事改良に役立てたい、といった意欲があったものと考えていいだろう。たとえ自らは投稿しなくても、このような記事に親近感を覚えた読者は多くいたはずである。この点は、『農業雑誌』で繰り返し強調されているように、地域により地質が異なり栽培する作物が異なるので「実験」が不可欠である農業固有の性質が理解されなければならぬ。ある地域での成功事例が、かならず別の地域でうまくいくとは限らないのである。そのためにも、まず小規模で「実験」を行うという段階が農事改良には必要なのである。このようにして作られた『農業雑誌』のスタイルは、後発の農業雑誌(先述)にも踏襲された。『産業時論』(『日本農業新誌』の前身誌)には当初、種子分与報告はなかったが発刊後すぐに読者からの意見により創設された。そして、『日本農業新誌』第一巻第一号の目次は、『農業雑誌』とほとんど同じ形式をとっている。『農業雑誌』によって確立した読者参加型のスタイルは、後から創刊される全て

の農業雑誌に一般化されるほどの成熟を見せたのである。<sup>(19)</sup>  
本稿で検討する鈴木静蔵が、農業雑誌を手にとったのは  
このような時期であった。

## 第二節 農業雑誌による農事改良と達成

### 1 青年談話会と明治二十九年の決意

明治一〇年、鈴木静蔵は鈴木静輔の長男として生まれた。  
成長した静蔵は明治二五年から「農事日誌一」(のちに「農  
事日記」)を付け始めた。この日記は、大正年間まで書き  
つづられ、農作業の覚書きと毎日の出来事が簡潔に記され  
ている。父の静蔵は安政元年生まれで明治二五年当時は三  
九歳であり、当面は二人で農作業を行い鈴木家の経営を支  
えていくことになった。父静蔵は養蚕を、静蔵は主に田畑  
を担当した。<sup>(20)</sup>居住する平尾地区は、近世段階には高一九  
一・三石、四〇軒ほどの村(平尾村)であった。明治三年  
の階層構成を検討してみると、階層分化はそれほど進んで  
いない「表4」。明治三年、平尾村は周辺の六ヶ村(大  
丸、押立、矢野口、東長沼、百村、坂浜)と合併し、稲城  
村(現在の東京都稲城市)となる。

静蔵は明治二五年に石井善一と青年談話会を結成した。

規約の第三条は「本会は実業及學術の研究又は討論を為し、  
其發達を図るを以て目的となす」<sup>(21)</sup>とし、平尾地区を構成員  
の範圍としている。創立直後、名誉会員として鈴木静輔、  
鈴木昶輔、石井松五郎を置き、この三名の補助を受けて  
『日本農業新誌』を購読していた。<sup>(22)</sup>青年談話会の会員と平  
尾地区内の階層「表5」<sup>(23)</sup>参照。甲乙を上層、丙を中層、  
丁戊を下層とする)の関係を考えると、上中層農民が会員  
のほとんどを占めている。特に明治二〇年代初期の会員は、  
下層農民は二名しかおらず、特に戊の区分からは一人もい  
ない。会員の多くは、明治二四年に父静蔵が中心となって  
結成した養蚕改良組と重なっている。青年談話会は試作畑  
(鈴木静輔の無代値貸付)を持ち、明治二七年の史料では、  
麦、陸稻の試作が確認できる。<sup>(24)</sup>

当初、静蔵の青年談話会での活動は、後年に比べるとそ  
れほど積極的ではなかったようである。明治二五年の「農  
事日誌」には、十八史略輪読会や政談演説会の記事が目立  
ち、農作業の記録もそれほど克明ではない。静蔵が本格的  
に農事改良を決意するのは、明治二九年まで待たなければ  
ならなかった。明治二九年二月の『日本農業新誌』には、  
農事改良を行って「御国の為に身の為に」「家をも興し名

表4 明治3年平尾村持高

持高	戸数
10~12	3
9~10	2
8~9	1
7~8	2
6~7	2
5~6	7
4~5	7
3~4	2
2~3	6
1~2	5
0~1	3

一戸平均持高 4.683石

(注) 『稲城市史』下巻、56頁所収の表から転載。

表5 平尾地区地価等分表、青年談話会等入会有無

区分	合計人数	平均地価金 (円)	養蚕改良組	青年談話会入会		
			明治24年	明治20年代	明治30年代	計
甲	6	662	5	4	2	6
乙	6	409	2	0	1	1
丙	12	268	2	4	2	6
丁	12	139	1	2	2	4
戊	3	19	0	0	0	0

(注1) 鈴木清家文書1173番、『鈴木家日記 一』218頁及び『稲城市史 資料編3』871頁より作成。

(注2) 鈴木静蔵家は上から2番目で地価金が739円。戊は宅地のみ所持層である。



をあげよ」との静蔵の歌が掲載されている。<sup>(26)</sup> その一月後には、いよいよ本格的な農事日記をつけ始める。「第一号農事日記 明治廿九年卯月」の「自序」には「英雄は事へのそんておとろかす、まっ農事日記でもこしらへて、記憶力の助太刀とし、それよりおもむろに計をめぐらさん」との決意が記してあり、三月二五日より記載が始まるのである。

その少し前の時期の投稿であろうか、四月五日発行の『日本農業新誌』<sup>(26)</sup>には静蔵の「地方農談会に就き感あり」が掲載されている。「余一日一地方に農学士を聘して農談会を開くの報を得欣然として傍聴に趣けり、席上<sup>ウチ</sup>農談作物の栽培及改良肥料の効用に於ける学理応用の実験談其他地質の分析等詳細に演せられたり。帰途該地方の傍聴者數十人と途を同ふす。一行中甲は曰く彼等の言座上の空論のみ実地に応用せは余輩か多年経験の法に及はざるや必せり。乙忽ち之に和して曰く改良肥料の如き不安全なるにして寧ろ従来の肥料の安全なるに如すと。丙又賛し丁又和し一行中皆然り。余は憤慨措く能はず。独り衆説を排して之を弁解し且つ百万農事改良せざる可らざるを説く。衆頑として応せず、却て余の説は冷笑せられたり」。周囲の農

事改良への冷淡な姿勢と静蔵の決意が対照的に論じられている。当時の静蔵を取り巻く環境はこのようなものであった。だが、静蔵の決意を後押しするかのようになり、青年談話会は父静輔の提供により水田試作場を持つことになった。五月五日には「試作場の結果のしきりに待るれば」として「おほやけの道につくさん誉にとて まきける種の秋そまたるゝ」と詠んでいる。明治二九年の春は、静蔵にとって決意の時であった。では、農事改良を決意した静蔵の行動を追っていくことにしよう。

## 2 農業雑誌の購読開始と農書の受容

静蔵は、青年談話会で共同購入していた『日本農業新誌』に加えて、個人で『農業雑誌』を遅くとも一月二五日号から、『興農雑誌』も四月号から購読を開始する。また青年談話会では、四月に東京池田書店から農書八冊をまとめて購入した。これは、静蔵の意向が強く反映したものと考えていいだろう。ここではまず、購入した農書の検討を行おう。購入した六冊のうち五冊は地質・肥料関係である<sup>(27)</sup>「表6」。現在、『土質演説筆記』『簡易地質学』は内容を確認できないが、確認できる四冊のなかでは『実用肥料書』

表6 池田書店から購入した「農用書六種」

	表題	著者など	発行日	頁数	奥書 定価	帳簿 価格
1	肥料製造独書 [肥料製造独案内]	著作兼発行者 梅原寛重 農学士 川上謙二郎校閲	明治28年6月3日発行	47	15銭	12銭
2	土性弁	著者 故人佐藤信淵	明治7年3月出版 明治28年10月18日再版発行	150	不明	44銭
3	土質演説筆記	-	-	-	-	14銭
4	実用肥料書	著作者 望月紫霞 校訂并序文 独逸林学博士 中村弥六	明治27年2月3日	183	45銭	40銭
5	里芋栽培法	著者 駒場豊学校寄留 船津傳次平	明治17年12月22日刻成	10	3銭	5銭
6	簡易地質学	-	-	-	-	14銭

(注) 帳簿価格は『青年談話会試作場農入歳出誌』より作成。

表7 肥料主要三成分の鈴木家自作肥料含有検討

実用肥料書	初・薬成分(匁)	窒素	磷酸	ポタツス	評価
明治28年型	下肥	57.3%	12.1%	30.7%	[-反歩に付 粉五石五斗] 下肥・厩粕・堆肥で窒素・ポタツス、厩粕・灰で磷酸。 磷酸が意識されていない点が特徴。
	厩粕	68.7%	26.0%	5.3%	
	灰	0.0%	26.0%	74.0%	
	堆肥(過度)	66.4%	12.6%	21.0%	
	堆肥(新鮮)	38.1%	17.8%	44.1%	
明治29年型	下肥	57.3%	12.1%	30.7%	全てで窒素、人造肥料・糠で磷酸、下肥・堆肥でポタツス。 磷酸を意識し、全体のバランスも取れている。
	人造肥料	39.4%	60.6%	0.0%	
	堆肥(過度)	66.4%	12.6%	21.0%	
	堆肥(新鮮)	38.1%	17.8%	44.1%	
	糠	28.7%	52.0%	19.3%	
明治32年型	大豆油粕	69.9%	13.6%	16.5%	大豆油粕で窒素・ポタツス、磷酸を与える。 磷酸と窒素を意識しながら、ポタツスも配慮。
	骨粉性過磷酸石灰	1.6%	98.4%	0.0%	

(注) [表8] の投下肥料から作成。

が当時のもっとも先進的な内容である。この内容は、①作物の主要三成分(窒素・磷酸・ポタツス(カリ))を肥料から摂取することが、肥料学の本質であることを原理から説明し、②日本の土壌には磷酸が乏しいことを的確に指摘したうえで、③各肥料に含まれる主要三成分を把握したうえでバランスよく与えることが大切である、との三点である。

では、この書物の内容と、静蔵の自作田の施肥に何らかの対応関係が見られるであろうか。「表7」は鈴木家の施肥状況と『実用肥料書』の内容を対照させたものである。

明治二八年までは、下肥、厩粕、堆肥により窒素を与えながら、灰によりポタツスを確保している。ここでは磷酸に意識が払われていない点に注意する必要がある。では、農事改良の方向性が固まってきた明治三二年を見てみよう。大豆油粕と、骨粉性過磷酸石灰によって、窒素、磷酸を重点的に投下しながらポタツスにも配慮している。『実用肥料書』で日本の土壌では磷酸が乏しいことが主張されていたことを思い返したい。静蔵は、同書の内容を充分に理解し、自家の稲作経営に役立てたのである。この点は、農事改良に取り組み始めた明治二九年でも、人造肥料と糠で磷

酸を与えながら全体のバランスも取れた肥料投下を行っていることで確認できるだろう。この年は肥料の価格まで農事日記に記している。これは、『実用肥料書』で購入する肥料の価格に留意する事について章を設けて述べられている点と対比できるだろう。静蔵は、五月一〇日に八王子まで青年談話会の人造肥料を引き取りに行ったのと同時に、自家でも早速導入を図っている。もちろん、投稿で述べられていた農談会でも地質や肥料の演説があり、肥料についての記事は農業雑誌上でも散見されるが、体系的な知識の受容という点では難があったと思われ、静蔵が農事改良を決意したあとすぐに農書を買って求めたことは、このような欠点を補うためであったのである。

### 3 情報の経路としての農業雑誌

体系的な知識の受容には農書が欠かせないとすると、農業雑誌の果たした役割はどの点にあるのだろうか。ここでは、農業雑誌の広告記事と、最新情報の入手、という点を考えてみよう。青年談話会の「歳入歳出帳」<sup>(28)</sup>は明治二十九年四月十七日に「一金壹円貳拾九銭 農用書六種代小為替にて振込む」とあり、東京池田書店から購入した六冊の書名

が列記されている。このような注文から、農業雑誌の広告の書籍リストを見たか、目録を入手していたかのどちらかであると言えるだろう。『農業雑誌』には「●農書及農用高等器械定価表●無料進呈 右御入用の御方は端書にて御申込を乞ふ 東京市牛込神楽町三丁目六番地 池田商店」との広告が出ている。<sup>(29)</sup>池田書店からの農書六冊の購入は、この広告をルートとしてなされており、『農業雑誌』を購読していれば、より深い農事改良の知識を手に入れる機会には事欠かなかったのである。<sup>(30)</sup>また、同年一月頃の「農事の友」には、『農業雑誌』の発行者学農社の住所を記している。これも、青年談話会で購読していた『日本農業新誌』の広告から情報を得た可能性が高い。残念ながら現在残されている同誌は、広告欄の多くが落とされて合冊されているため確認はできていないが、その可能性が高いことを指摘しておきたい。<sup>(31)</sup>

では、最新情報の入手という点ではどうであろうか。静蔵が『農業雑誌』の購読を始めた直後の二月一五日から同三月一五日まで四回にわたって「肥料の正否及び売買の状況」と題する特集が組まれている。<sup>(32)</sup>これは、農商務省技手の農学士が千葉県等に出張して取り調べた報告を編者が全

国農家に有益であるとして掲載したものである。肥料についての体系的な説明から始まり、無機質肥料(人造肥料、過磷酸石灰)についての東京人造肥料株式会社製品などの最新の情報にも触れている。この時期の静蔵の購読態度からこの記事を読んでいることは確実と思われる、無機質肥料の導入を自信をもって行う役割を果たしたと言っていだろう。

#### 4 種子入手経路としての農業雑誌

青年談話会の活動でも『日本農業新誌』の種子分与報告から麦、陸稲の種子を手に入れて試作していることがわかるが、静蔵は稲の種子を手に入れ農事改良に役立てようとした。明治三〇年四月二日「兵庫へ催促状、伊豆へ水種注文状発す」との記述がある。兵庫への催促状とは、三月一日に出した兵庫県日本種苗園への注文種子が届かないことへの催促であり、のち四月一九日に到着している。では、伊豆への注文状とは何か。四月二日の少しまえの『農業雑誌』第六二〇号(三月二十五日発行)には、次のような種子分与報告が掲載されている。

#### ● 粳稻一種

分与者 伊豆国加茂郡三坂村 勝田権左衛門

穂じまり稲は一名五百粒とも称し実際我地方在米種よりも穂締り粒着多く上作なれば一穂三百八九十粒より四百粒まであり、昨年収穫一坪に付一升六合八勺則ち一段歩当五石余を得たり、此種子御要望の諸君は郵券式錢五厘を投ぜらるれば精選種子三十匁速に発送すべし

農事日記を見ると、例年五月初旬が田植えの時期である。

種子の到着を待ちかねた静蔵が、兵庫県の日本種苗園に催促を行ったのも同じく稲の種子であると考えていいだろう。

ところで、二年後から鈴木家で導入され、のちに主要な品種となる今一と太政官は畿内の種子分与報告で見られる銘柄であり、このとき兵庫から導入されたようである。静蔵と兵庫県の日本種苗園との関係は、二月の『日本農業新誌』<sup>(33)</sup>に「雑誌分与 種苗新報二冊宛無代価分与す望のものは往復はかきにて申込あれ 右 摂津国川邊郡稲野村 日本種苗園」との記事広告を静蔵が目にしたことから始まったようだ。ここにある「種苗新報」とは種子のリストのことであり、ここに今一と太政官が載っていた可能性は極めて高い。では、この今一とはどのような種子であろうか。<sup>(34)</sup>

#### ● 粳稻今一

分与者 因幡国気多郡正條村

米作改良組合取締人 田中 直治

該種は近年一本稲の中より選抜せし稲種にして稍や晩種に属す。葉の長さ三尺五寸茎稈は細く株張る著しく風雨過肥に倒れず収穫の多量なるは内国種中恐らく本種に勝るものなしと云ふも敢て過言にあらず。(中略) 元來該種は少しく湿気を含む處を好むを以て宅地近傍又は池沼に沿ひたる田地に作るときは一段歩収穫四石を下るとなきは余の実験上保証する所なり。(以下略)

分与者は、利点として収量の多さ(この点は伊豆の穂じまりと共通する<sup>35</sup>)と、何れの地味にも適すること、また湿気を含む所を好むことの三点を挙げている。元來平尾には摘田が多く、排水が課題<sup>36</sup>だった。今一は、平尾にはうってつけの種子だったのである。明治三〇年の「前田」では土佐で三俵三斗であったのに、翌年の今一では五俵五升の収量をあげている。その後、明治三二年から同三四年まで蒔き場所を増やしている「表8」。同時期に太政官も蒔き場所を増やしている。種子の改良は農業雑誌を通して得た種子により行われ、鈴木家の米収量の増加に大きな成果をもたらしたのである。

5 農事改良の達成と、試作田・農業雑誌購読の終了

しかし、このように静蔵が主導的な役割を果たしてきた青年談話会の試作場に関する記述が農事日記からだんだん少なくなっていく。明治三三年にはそれが顕著になり、翌三四年には遂に田試作場の記事が消える。このことは、大正時代の静蔵の「沿革史」からも確認できるのである。<sup>37</sup>

このような背景には、主導的役割を果たしてきた静蔵自身の達成感があった。「表8」を見てほしい。これは、鈴木家の稲作について、農事之友、農事日記の記述を抽出して表にしたものである。明治三一年の前半がないのが体系的な比較を困難にしている部分もあるが、それでも静蔵の農事改良の足跡が追えるだろう。

取れ高の特記欄には、静蔵のその年を振り返った総括を加えた。明治三〇年には自家は大凶年、各地も凶作との記述があるが、明治三一〜三四年は豊作、豊年、大豊作との評価が続く。特に明治三二、三三年は「世間一般違作年なり」「世間は違作年なり」とあり、この時期に静蔵は明治二九年以来取り組んできた農事改良が成功を収めたことを確信したに違いない。試作田は種子と無機質肥料の導入を柱とし、その試作結果を経て会員の自作経営に導入されて

〔表8〕 鈴木静藏家稲作

明治	種子名	稲場所	取れ高		苗代 摘田	畝数	種籾(田籾) 肥料							
			俵	斗			下肥	大豆	粕	人造肥料	過リン酸	灰	特記	
27	不明	丸山下	4		摘田	5升5合	8分ツツ2俵半		2斗4升5合					ツクテ13杯
	又エ門楯	新地前	5	4	苗代	5升5合								
	土佐	前田墓下	5	1	苗代	9升6合 (宮田太田込)	1荷							
	不明	宮田	5	1	摘田	3升	1俵半		口斗8升					ツクテ7杯 (ツミノカ)
28	土佐	宮前	1	3.0	苗代	△8升5合								ツクテ7杯、 糠6升
	サ(盛摩)	宮前	1	0.2	摘田	3升2合	1荷半		1斗5升			5俵		ツクテ16杯、 糠1斗(布味 等他肥料含 む)
	土佐	宮田(宮田藤津)	6	0.3	摘田	6升4合	2荷		4斗			1俵3分		ツクテ6杯、 糠6升
	盛摩	宮田大田	2	0.9	苗代	○4升			1斗6升					
	土佐	前田	2	3.6	苗代	△			2斗					
	モチ	前田苗間	1.9		摘田	2升	1荷		1斗1升5合			7分		ツクテ6杯、 糠6升
	盛摩	墓ノ下	2.0		苗代	○			4升					
	モチ (又右衛門楯)	新地前	4	1.1	苗代	5升5合			1斗5升	2斗5升				
	盛摩	丸山下 (丸山下深田)	2	3.0	摘田	6升	8分つツ2荷		2斗				1俵	ツクテ13杯、 糠6升
	鎌倉	丸山下	2	3.8	苗代	5升5合							俵依	2
					合計25俵3斗 8合									
29	土佐カ	前田(前田墓下)	5	0.5	苗代	生7升								
	モチカ	新地前 (F1枚を除く)	3	3.6	苗代	4升								
	モチ	新地前(下校)	3	3.6	摘田	生1升8合	半荷			5升(0.25円)	2升(0.012円)			堆肥4杯半、 糠6升 (0.114円)
	鎌倉カ	下田	2	1.5	苗代	生5升5合								
	盛摩	丸山下	2	3.5	摘田	生6升4合 (例年6升 5合→6升 過リン 酸投)	1荷半			1斗5升 (0.75円)	2升(0.012円)			堆肥13杯半、 米糠1斗5升 (米糠0.285)
	サトニシキ (白米籾)	宮田道下(1枚)	3		摘田	生1升強	2荷			2斗(1.0円)				堆肥14杯半、 米糠3斗2升 (0.6円)、 糞7.8升
土佐	宮田大田試作田 (試作場を除く)	3	3	摘田	生4升8合									
					収穫袋数19袋 3斗									
30	モチ(又エ門楯)	新地前	5	3	苗代	生5升5合		生7升	3斗			追肥若干		
	鎌倉	(浮場)	3	0.6	苗代	生5升7合 5勺								
	土佐	前田	3	3	苗代	生7升						追肥若干		
	鎌倉	下田	2	2	苗代	生5升7合 5勺								
	精選磯摩	宮田道下1枚	2.9		摘田	1升	1荷1分5厘 (保箱3杯半)				完全肥料1畝 (2.0円) 駄糞	追肥1斗6升	灰	堆肥13杯半、 米下土2杯
	又エ門楯	宮田大田及上ノ 田 (試作場を除く)			(苗代に一括)	瓊田	4升5合							
					米穀取穫16俵 3斗余 大凶 年ノ各稲束は 凶作なりとの 報類々									

(241) 農業雑誌の受容と実践

明治	種子名	育場所	取れ高		苗代 播田	畝数	神映(田植)肥料						
			後斗	特記			下肥	大豆	ア粕	人畜肥料	過リン酸	灰	特記
31	糯米、稷	宮田	4斗	1〜6月史料 「右石塚の 多に風当り 来る」			1杯(道)	半枚(道)		1畝(道)			
	糯米	新地前	4斗	1〜6月史料				8升強(道)					
	今一	前田	5斗	同上				8升強(道)					
	鎌倉	芋場	3斗	同上				8升強(道)					
	鎌倉	下田	3斗	同上									
	太政官	墓下		2.7	同上								
		外カキアツメ		1									
				米総収穫 21 俵 3斗 5升 外 米 5斗 雑作/水産下 産									
32	モチ種(天狗モチ)	宮田(宮田、大 田遺下)	3		播田	4升	上等 2俵弱	2斗 8升 (1枚)			1畝	灰	肥少なくて12 杯半
	太政官	宮田 (坂作場ハジ)	3		播田	1升 5合							
	今一	墓下、前田	6斗	2.5	新地前苗圃入	苗代	7升	3斗 4升弱			2畝(大豆粕 1枚半混合)		
	太政官	新地前	4斗	1.5	苗圃除き	苗代	5升 5合		3斗強		2畝(大豆粕 1枚半混合)		
	太政官	芋場	3斗	2		苗代	5升 7合		2斗		2畝(大豆粕 1枚半混合)		
	今一	下田	3斗	2		苗代	5升 5合						
				総収穫料 21 俵 3斗 5升 敷米 4斗(陸 稲共) 豊年 /豊年一般連 作年									
33	今一	芋場	4		苗代	5升 7合		1斗 8升			7升		
	モチ	新地前	4斗	2.5	苗代	5升 5合		1斗 5升			1斗 5升		
	今一	前田、墓下	6斗	0.8	苗代	7升		2斗 1升			1斗 9升		
	太政官	宮田	4斗	1.7	播田	6升 3合	2俵弱	2斗 8升 (1.42円)		有機1号半 弱(0.575円)	1畝(1.6円)	灰	
	今一	鳥居前	4斗	3.2	苗代	7升		1斗 8升			1斗 5升		
		外カキアツメ		0.8									
				総収穫 24俵 1斗 龍米 3 斗 豊作/世 間豊作年									
34	今一	宮ノ前	5斗	0.8	苗代	7升		1斗 9升			1斗 5升		
	大和錦梗	宮田	5		播田	6升	2俵		籾ノ粕 4斗 (3.3円)				フクツキ種 播 15杯半、成ツ ミ種 1杯半
	今一	前田、墓下	6斗	1	苗代	7升		1斗 (1.32円)			1斗 (1.55円)		
	モチ	新地前	4斗	0.5	苗代	5升 5合		1斗 1升 3升			1斗 6升		
	今一	芋場	4斗	0.5	苗代	5升 8合		2斗 5升					播養少澁
					総収穫 25俵 1 斗 大豊作/ 世間豊年								
35	今一	宮前	3斗	1.5	苗代	7升		1斗 7升 3升強			1斗 5升		
	モチ(又右衛門種)	宮田	3		播田	6升	3杯		6			1俵	肥ツキ種 15 杯半
	今一	前田、墓下	4斗	1.5	苗代	7升		1斗 8升			2斗		
	大和	新地前	4		苗代	5升 5合		2斗 5升 1斗 1升			2斗		
	今一	芋場	2斗	2.5	苗代	5升 8合強		2斗 3升					
					総収穫 17俵 3 斗 外 龍米 3 斗 5.6升 未曾 有の凶作/連 作といふより 飢饉								

さらに改良が重ねられた。明治三二年以降も、大豆粕と過燐酸石灰の比率が年により異なったり、明治三四年には苗代で過燐酸石灰の施肥を控える、といった微調整を行いつつながら農事改良は進展していったのである。

このような試作田の終了は、青年談話会の他のメンバーの参加姿勢にもあったのではないかと推測させる記述もある。明治三〇年五月三日の試作会議には「白井氏一人来会」とあり、同年の試作結果表は石井三千三と、翌年の表試作結果表も同氏と二人で作成している。青年談話会は基本的には静蔵のリーダーシップのもとで運営されていたと考えられ、農事改良の一定の達成により試作田はその使命を終えたと評価していいだろう。

また、あれほど熱心に取り組んでいた種子分与報告への投稿も明治三二年には見られなくなってしまふ<sup>(38)</sup>。また、他地域からの種子注文・受取も同じ明治三二年に水稲は終わり、翌年は煙草種を注文したのみである。この点は、『農業雑誌』の購読姿勢にも同様の傾向が見られる。明治三五年一月一日には「農業雑誌(進呈)着」とある。購読を止めていたために、学農社から再度の購読の催促を受けたのである。一旦、半年だけ購読は復活したが、以降は全

く『農業雑誌』の記事は見られない。試作田の終了とほぼ同時期、静蔵は農業雑誌への関心を急速に失っていき、しばらくして購読も終了したのである。

### 第三節 農事改良による平尾地区の変容

#### 1 肥料の共同購入

このように試作田で一定の成果を挙げたあとは、肥料の共同購入が図られた。早く明治三〇年九月に坂浜地区と共同購入を「企つ」との記述があるが、その後は静蔵の過燐酸石灰などの購入に併せて少量の共同購入が見られるだけである。しかし、明治三四年八月には「共同肥料(糠)見本検査に行く」との記述が見え、翌三五年、三六年にはかなり大がかりに共同肥料が購入、分配されている。ここでは明治三六年の状況を表にまとめてみた「表9」。

まず、青年談話会以外のメンバーにも参加が認められており、合計一〇名の参加がある。共同肥料購入は白井善一と相談し、彼と平尾地区を二つに分けて担当していた。それでも参加者が一〇名であることは、少ないとの印象は否めない。また、明治三〇年時点の等分表で甲に分類される者の購入が目立つのである。更に注目したいのが、静蔵の



表9 明治36年肥料共同購入配布先

年月日	種類	甲	甲	丙	丁	丁	丁	丁	戊	不明	不明	不明
5月15日	過磷酸 (呷)	2	2	4	---	---	---	---	---	---	---	---
5月25日		---	---	---	---	---	---	---	---	---	2	---
5月27日		---	2	---	---	1	---	6	---	---	---	2
6月1日		6	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
6月5日		---	---	---	---	---	2	---	---	---	---	---
5月12日	大豆粕 (枚)	5	4	5	1	---	---	---	---	---	---	---
5月15日		5	1	3	---	---	---	---	---	1	---	---
5月25日		2	---	2	---	1	---	---	2	1	3	---
5月26日	糠 (俵)	---	1	5	1	3	---	---	---	---	---	---
6月1日		6	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

表10 明治32年農作業手伝表

年号	月	日	農作業	名前		
32	5	2	麦肥落場撥く、芹場へ落葉かき込む	忠次郎		
		3	南瓜植る、宮田打ちかえす、苗間しろす	友次郎		
		7	芹場打つ	忠次郎		
		8	杉苗植る	ハナ		
		10	芹場畔刈る、胡瓜植る	友次郎	原安	
		12	植田打は終る	忠次郎	友次郎	仁助
		14	摘田種浸水	正作		
		15	糯陸稲（水選せず）、旱不知（水選する）蒔く	友次郎		
		17	宮田摘田する	英太郎		
		18	茄子元肥す、陸稲赤野毛蒔く	忠次郎		
		21	蕎麦作きる、陸稲赤野毛蒔く、種三升水選す	友次郎		
		22	茄子植る	正作		
		23	陸稲旱不知蒔く、下肥、胡麻蒔く、糠一俵着	忠次郎	市太郎	

小作人でも共同購入に参加していないものがあることである。同年に米五俵を小作している者も参加していない。このように、農事改良で最も重要な要因である肥料の改良において、下層農民と静蔵たちには大きな違いがあった。この点については、後述する。

## 2 村内農民への情報伝達

青年談話会の活動や鈴木家で導入された農事改良の成果は、村内農民にどのような影響を与えたのかを、上中層と下層に分けて検討していきたい(区分は「表5」参照)。

まず、上中層農民同士では、種子の交換を行うことが頻繁に見られる。静蔵の場合、米だけではなく桑苗や大根の種は青年談話会の仲間から提供を受けていた。また、青年談話会会員である石井善一の経営帳簿からは明治三〇年に過燐酸石灰を一円七四銭で購入しており、経営への導入が確認できる。

一方、下層農民ではどうだろうか。ここでは、情報の伝達と導入を区別して検討する。まず情報の伝達についてであるが、「表10」は明治三二年五月の養蚕が始まる前まで、静蔵が行った作業と下層農民の農事日雇いの作業状況

をまとめたものである。<sup>(41)</sup>このような農事日雇の仕事には、静蔵が行ってきた苗代耕作や、桑苗の買出し、農業雑誌や近隣の上中層農民との交換で得た種子や苗の取扱いも含まれていたと考えられる。例えば五月二一日には友次郎(「表5」では戊に該当)と陸稲赤野毛の蒔種と種三升の水選作業を行っている。下層農民でも、静蔵の農事改良の成果を知見する機会には事欠かなかったであろう。また、『農業雑誌』には試作場の奨励とともに、その景況標を立てることを促す内容が記載されている。青年談話会の試作場も景況標を立てており、試作を行っていることを広く村内に知らせることに役だったと考えられる。<sup>(42)</sup>

## 3 下層農民の農事改良の状況

次に、下層農民の農事改良の成果の導入について見てみよう。摘田については、下層農民が所有する自作田を摘田から苗代に変更した時期や有無については史料的には明らかにできない。鈴木静蔵の所有する小作地と自作地の割替えが明治三六年に行われているが、明治三九年には摘田であった「宮田上町」が苗代になって自作地に戻ってきている。また、この期間の途中に小作地に出された「下田(丸

山下)は摘田であったものを苗代に替えてから小作に出している。<sup>(43)</sup>少なくとも自己所有の田は苗代に変更しており、それを小作する下層農民にも小作という形態であるにしろ一定の効果があつただろう。種子については、小作米を鈴木家が導入した種籾(「今一」等)で受け取つたことが二例確かめられる。<sup>(44)</sup>同様に、他の作物についても下層農民とのやりとりはある。種子については、交換などの手段によってある程度下層農民にも広まったと考えていいだろう。では、肥料についてはどうか。先ほどの共同購入では、下農民が購入している事例は若干しか見られない。また、鈴木家の小作人は一人も含まれていないのである。明治四〇年代になつても小作料の割引や本来静蔵が希望する小作料よりも一割程減額されて小作契約が結ばれている場合もあり、下層農民が安定的な耕作を行つていなかったことを表している。

なぜ、下層農民は化学肥料を購入しないのだろうか。「表8」により、農事改良の成果とあわせて検討してみよう。明治二八年の「前田墓下」は人造肥料・化学肥料を使わず大豆・小麦を中心として一・六六石(前田苗間分を換算集計)の収穫がある。これは明治三四年の金額で二・一

七八円となる。明治一九一三六年までの過燐酸石灰を中心とした施肥で平均して二・一八石の収穫があり、平均的な施肥量である明治三三年では金額にして五・七十七円となる。鈴木家の史料では、この収穫を金額に換算することはできないが、共に農事改良を行った白井善一家には「会計一覧 収入部」という史料が残されており、ここでは「米今一 壹俵五円」を販売している。収穫の増量分である〇・五二石は六・五円となる。従つて、六・五円の収入増を得るために、新たに三・五三九円の肥料代が必要だったのである。鈴木家の場合は、この差額(約三元)がそのまま収入増となるが、小作地の場合は事情が異なる。鈴木家の小作料率はだいたい五割であつた。<sup>(45)</sup>従つて、収入増部分はほとんど手元に残らないのである。もちろん、豊年の場合は事情が異なるが、農事改良を行った鈴木家でも明治三〇年、三五年は「大凶作」「凶作」となつている。下層農民にとつて、農事改良の情報は充分伝播していたが、この時代に入つてきたもっとも根幹をなす農業技術である肥料の局面ではその成果を充分に享受できない状況であつたのである。

この点は、農事日記の土地売買の記述からも確認できる。

明治三七、三八年にかけて三件の土地売買・抵当書入があり、いずれも「表5」での丁と甲区分の者との間で行われたものであった。下層農民に肥料代を負担する経済力があれば、凶作の危険を冒しても肥料投下を選ぶ可能性もあるが、そのような危険を冒す状況ではなかったのであろう。<sup>(46)</sup>

おわりに

ここまで検討してきた内容を、農村にとっての農業雑誌という観点からまとめてみよう。

明治九年から発行が開始された農業雑誌は、類似の雑誌を含めると多いときで一万部、少なくとも五千部の発行部数があり、明治三〇年代までそのような状況は続いたと考えていいだろう。ここでは、一方的に情報が伝達されるのではなく、寄書・報告などに自らが参加し、その内容を実践する読者がいた。この点は、この時期における農業雑誌の役割として銘記される必要があるだろう。

本稿で検討した鈴木静蔵のように、極めて熱心な読者が農業雑誌から情報を得て、必要な農書を取り寄せて知識を補完し、必要に応じた種子を遠隔地から取り寄せて農事改良を行っていった。このようにして得た知識は、明治政府

と農商務省の官僚が欧米の農業技術を日本の土壌に即して導入していくという、当時の農政の課題と一致しており、導入された農業技術・学理とも当時もっとも先進的なものと遜色のないものであった。

このような農事改良は自家経営のためだけではなく、地域への導入も意図したものであった。青年談話会のメンバーは上中層農民が主だったが、農事改良の状況を伝える努力をほらい、肥料の共同購入では青年談話会以外のメンバーも参加することができた。また、種子の交換や農事日雇いともあわせて、地域に持ち込まれた最新の情報は下層農民にも広く伝わったと考えていいだろう。しかしながら、収量の半分に設定された小作料と数年に一度訪れる凶作により、農事改良の二つの柱(種子と肥料の改良)のうち、より重要である肥料の導入において大きな限界があり、結果として土地を手放す下層農民がいたことも事実である。

また、農業雑誌は近世的な農業技術を地域において改良しようと思図した農村の上中層農民が購読者であった。その多くは、農事改良が一定の成果をあげれば講読を止め「卒業」していったと<sup>(47)</sup>考えていいだろう。農事改良が進むにつれて、そのような新しい読者は減っていく。明治三九

年に博文館から出された『農業世界』は農業版『太陽』と違った内容で、農業雑誌独特のスタイルは隅に追いやられてしまった。その後、『農業雑誌』は低価格で月一回発行することにより差別化を図るが大正九年に物価騰貴のあおりを受けて廃刊したようである。この「交替」は、読者の質と層の変化に関わっていると考えられるが、この点は本稿の課題とは別に検討されなければならないだろう。

- (1) 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』（日本エディタースクール出版部、一九九七年）。
- (2) 鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』（思文閣出版、二〇〇一年）。
- (3) 鹿野政直『資本主義形成期の秩序意識』（筑摩書房、一九六九年）。ここで鹿野は、経験主義から実験主義への転換、実験的精神の鼓吹者として津田を取り上げ、理論と実際の統一を信じる精神態度が全国にいる農事先覚者に少なからぬ刺激を与え、かれらがこの雑誌を討論や知識交換の共通の場としていった、と評価した。
- (4) 伝田功『近代日本経済思想の研究』（未来社、一九六二年）、藤井隆至『農事雑報』社主、十文字信介（『日本歴史』第四二〇号、一九八三年）。

(5) 大西伍一『改訂増補 日本老農伝』（農山漁村文化協会、一九八五年）三六〇頁。

(6) 「明治農業雑誌界の概観―農業事情の一反映として」（農業発達史調査会『農業発達史調査会史料 第六〇号』一九五二年）。

(7) 同右、二〇頁。

(8) 『農業雑誌』は、日本の農業雑誌で最初に発刊されたものであるだけでなく、大正九年まで発刊され続けた。また、第二項でみるように後継の雑誌にも大きな影響を与えたことから本稿では『農業雑誌』を主要な分析対象として取り上げた。

(9) 『農業雑誌』第一九五号（明治一六年一月三日発行）を例にとった。

(10) 『農業雑誌』第二二三、二二四号（明治一七年七月二日、七月二六日発行）に連載。

(11) 第二六号は明治一七年八月三日発行、第二一七号は明治一八年二月二五日発行である。

(12) 『農業雑誌』第三二二号（明治一八年三月二八日発行）。

(13) 『農業雑誌』第三三三三号（明治二二年二月二五日発行）の社告で「本年は非常に読者諸君の愛顧を辱ふし本誌部数の著しく増刊を告げ」とある。同様な社告は明治二二年末でも見られる。

(14) 『警視庁統計書』の発行部数については、朝岡邦雄「明治期博文館の主要雑誌発行部数」(国文学研究資料館編『明治の出版文化』、臨川書店、二〇〇二年)の批判的検討がある。筆者も『日本農業新誌』について、朝岡が典拠している稿本『博文館五十年史稿』にあたってみたが同資料に記載されているものは発行数が多い雑誌に限られており、これに替わる資料は見出せなかった。

(15) 『太陽』は『日本商業雑誌』『日本農業新誌』『日本大家論集』『日本之法律』『婦女雑誌』『文芸共進会』の六誌を集約した。なお、明治二八年一月の「謹告」では『日本農業雑誌』とあり、永嶺もこれを踏襲しているが、第一巻第三号の残部発売広告では『日本農業新誌』となっている。ただし、『警視庁統計書』も明治二七、二八年は『日本農業雑誌』としている。なお、『太陽』では「農業」にページが割かれているが、ごく数ページ、学士等の論説が掲載されているだけで、後で検討するような農業雑誌特有のスタイルは見る影もない。

(16) 後で事例として扱う鈴木静蔵が『農業雑誌』の購読を始めたのが明治二九年であることから、この例をあげた。しかし、『農業雑誌』がこのような誌面構成を取るのとは明治二〇年頃からであり、また投稿者の多さ(ここでは、同一質問への返答者の多さ)からみると、むしろ明治二三、

二五年頃がこのような傾向の極限であった。しかし、このような傾向は少なくとも明治三〇年代前半までは続いており、鈴木静蔵の事例に一般性はあると考えている。

(17) 『農業雑誌』第三五二号(明治二二年一月十五日発行)には「●米国種大小麦 余が該麦種分与を本誌に報ぜしより請求者ハ二府二十八県より八百九十一人に達し余が貯蔵の種子を尽くせり、依て自今請求を固持すと上野国北甘葉郡南蛇井村小柴孫治郎君々」とある。

(18) 『農業雑誌』第三五九号(明治二二年二月二十五日発行)同年の最終号)では、二頁にわたって掲載されているが、前年の最終号ではわずか二件のみである。

(19) 従って、本稿で分析の対象とした読者の傾向は、『農業雑誌』一誌に限られるのではなく、ひろく他の農業雑誌の読者にも当てはまることだと考えている。しかし、明治三九年発刊の博文館『農業世界』にはこのような『農業雑誌』独自のスタイルが少しは見られるものの、むしろ『太陽』のような総花的な圧倒的分量をもって読者に迫るものであり、『農業雑誌』自体もこのような傾向に改変し、最終的には廃刊に追い込まれる。従って、ほぼこの時期を『農業雑誌』独自のスタイルの終期と考えている。

(20) 『鈴木家日記』(稲城市教育委員会、一九九八年)第一巻解題による。

- (21) 『稻城市史 資料編3 (近現代I)』(稻城市、一九九七年)五二六頁。
- (22) 前掲『稻城市史 資料編3』八七一頁。
- (23) 会員名簿は、前掲『稻城市史 資料編3』八七一頁による。地価表は鈴木清家文書 一一七三番(同文書は稻城市教育委員会の複写版による)。
- (24) 前掲『稻城市史 資料編3』五三〇頁。
- (25) 『日本農業新誌』第五卷第四号(明治二十九年二月二〇日発行)。なお、以下静蔵の「農事日誌」「農事日記」中の記事には当該条の日付を記すことにより注を省略する。
- (26) 『日本農業新誌』第五卷第七号(明治二十九年四月五日発行)。
- (27) (28) 前掲『稻城市史 資料編3』五三四頁。
- (29) 『農業雑誌』第五八〇号(明治二十九年二月二五日発行)のち、四月五日号まで継続して掲載されている。
- (30) この点で博文館の『日本農業新誌』は多くの売捌所をもったことから、重要な役割を果たしたと考えている。
- (31) 前掲『鈴木家日記』第一卷五七頁。「農事之友」は静蔵が明治二七〜二九年の間、農業についての必要事項のみを記した覚書きである。なお、「農事之友」には農業雑誌からの抜き書きがあり、例えば「西瓜栽培法」は『農業雑誌』第六二二号から、「重要作物種子貯蔵年限」は『日本農業新誌』第五卷第八号まで掲載されていた表紙裏を転記したものである。
- (32) 『農業雑誌』第五七九号(明治二十九年二月二五日発行)第五八二号(同年三月二五日発行)。
- (33) 『日本農業新誌』第五卷第四号(明治二十九年二月二〇日発行)。
- (34) 『農業雑誌』第五七四号(明治二十八年二月二五日発行)。
- (35) 静蔵が水稻を取り寄せる際には一貫して収量の重視が見られる。明治二十三年三月一日に「遠江へ奥白茶水稻注文出す」とあるのは、『農業雑誌』第六八六号(同年一月二五日発行)及び第六八七号(同年二月二五日発行)の寄書欄に掲載された奥白笹であり、「大抵の田地に能く生育繁茂し米粒稍や小なれども收穫極めて多量なり」とある。静蔵は、三月に取り寄せる種子を一月の記事にまで遡って調べ、種子分与報告以外の記事にも目を通していたことがわかる。
- (36) 大正四年作成の「平尾青年談話会 事業ノ大要」(前掲『稻城市史 資料編3』八六五頁)では、「平尾ハ古来摘田ナリシヲ、植田ニ全部改良シテ大ニ增收ヲ獲、(後略)」とある。ここでは時期が明示されていないが、鈴木静蔵家でさえ、明治三五年まで摘田が存在することから、長い年月がかかっていることがわかる。

(37) 前掲『稻城市史 資料編3』八七二頁。

(38) 静蔵は種子を注文するだけでなく、報告者でもあった。例えば、『農業雑誌』第六一九号(明治三〇年三月一五日)に掲載された在来の又右衛門糯は全国から一二通の注文状が来た。

(39) 例えば、『鈴木家日記』明治三〇年の事例では「六月

一日 石井三千三氏ヨリ薺ノ分与アリ」「六月二日 菜豆 薺ク(石井)寛一氏分与ノ北海道ノ種、墓ノ下」がある。

(40) 石井實家文書 四七番(同文書は稻城市教育委員会の複写版による)。「明治三〇年八月 歳入歳出明細簿 石井善」に、「十一月五日 金壹円七十四銭 過燐酸」とある。他に、糠、大豆粕も購入している。

(41) 農事日記は、例えば「一月三日 英太郎来る。麦作りきる」のような記述をもとにして日雇賃金の精算にも用いられている。この点から、静蔵とはほぼ同じ農作業に従事したと考えて構わないであろう。

(42) 『農業雑誌』第五七六号(明治二九年一月五日発行)。また、農年日記には、「・試作場へ標杭立ッ」(明治二九年八月二六日)や「・試作場麦作標杭立ッ、附景況ヲ記ス」(明治三〇年四月一日)がある。

(43) 鈴木清家文書 一二〇八番。

(44) 「・シタ(友二郎)ヨリ残り小作米壹俵壹斗受取ル、

今一ノワリマシ及種粉ノカシ(米ニシテ壹升)都合六升式合五勺引」(明治三七年二月一五日)、「・馬場ノブヨリ小作米来ル、今一壹俵」(明治三八年二月五日)。前者の「今一ノワリマシ」とは今一の場合、小作料を引くことを意味していると思われるが、詳細は不明である。

(45) 明治三三、三四年に約四俵の収穫を上げていた「芹場」は、明治四〇年には米二俵五升で小作に出されている。

(46) ただし、この点はこの時期の農業経営のあり方と地域の状況を詳しく検討したうえでなければ因果関係としては成り立たないが状況の説明として触れることにした。

(47) 『農業雑誌』の記事を見る限りでは、いったん静蔵のように農事改良の基本的な能力(主に施肥の割合を規定する原理的知識)を身につけてしまえば、常に農業雑誌の購読を続けて新しい知識を補い続けなければならないような大きな技術的な革新はない(既に身につけた能力の応用で対応しうる)と考えている。ただ、この点もこの時期の農業経営のあり方と併せて検討が必要であり、(46)と同様に今後の課題にしたい。

〔付記〕 本稿は、二〇〇五年六月四日に行われた第一八回「書物・出版と社会変容」研究会で行った報告をもとに作成しました。当日、貴重なご質問やご意見をいただいた皆さまに感謝しております。また、文書所蔵者の鈴木幸子様、



石井實様と、文書閲覧の際にお世話になりました稲城市教育委員会の小谷田政夫様、『鈴木家日記』の解読・出版を行ってくださいました稲城市教育委員会及び関係者の方々に御礼申し上げます。

二〇〇五年五月三十一日受稿  
二〇〇五年六月十三日レフェリーの審査  
をへて掲載決定

(一橋大学大学院博士課程)